

教育場面における夢の活用 (Ⅱ)

—夢と宗教—

細 部 国 明

夢を日常の教育実践の中に活かす工夫をしていくとき、諸々の問題につき当たる。その1つに宗教の問題がある。宗教をどのようにみるかによって、おのずから宗教夢の活用の仕方に違いが生じてくる。今回は無意識心理学の発展に多大な貢献をした、フロイトとユングが、宗教をどのようにみていたかを検討する。

1. 夢と宗教

宗教は人間のたましい (mind) の発現形式としてはもっとも古く、且つもっとも一般的なものの1つであるが¹⁾、その宗教と夢が密接な関係にあることがうかがわれる。下記にその若干の例として、東西の代表的宗教と我が国の宗教における幾つかの事例を示す。

ヨーロッパ文明と切っても切れない関係にあるキリスト教の聖典、旧・新約聖書には数多くの夢が記載されている。そこには新約聖書の中心であるイエス・キリストの母マリヤの夫となったヨセフの夢もある。ヨセフの生涯は夢によって大きく左右されている。キリストの母マリヤはヨセフと婚約していたが、まだ一緒にならない前に、聖霊によって身重になった。ヨセフは正しい人であったので、彼女のことを公になることを好まず、ひそかに離縁しようかと思いつめぐらしているとき次の夢を見た。

〔夢11*〕 主の使が夢に現れて言った、「ダビデの子ヨセフよ、心配しないで

* 夢の引用は「教育場面における夢の活用(Ⅰ)」からの通し番号で示した。

マリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである。彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである²⁾。

ヨセフは夢のお告げを受け入れてマリヤと結婚し、男の子をもうけた。これがキリストであった。その後、人生の岐路で、ヨセフはまたもや夢によって導かれている。

〔夢12〕見よ、主の使が夢でヨセフに現れて言った、「立って、幼な子とその母を連れて、エジプトに逃げなさい。そして、あなたに知らせるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが幼な子を捜し出して、殺そうとしている³⁾。

この夢によって、ヨセフは妻子を連れて素早くエジプトにのがれた。その後、ヘロデはキリストの生誕地ベツレヘムとその附近の男の子をことごとく殺したが、ヨセフ一家はヘロデが死ぬまでエジプトにとどまっていたので、キリストの生命は助かった。

これらの夢とその逸話にも表われているように、古代においては夢はしばしば、人間の力では知ることができない啓示の重要な手段となっていた。そこにはダニエル⁴⁾のように、特別に幻と夢を解釈できる才能の持ち主もおったが、それは本人に知恵があるためではなく、その解明は秘密であった。そして知恵は神のものであり、秘密をあらわすことができるのも天の神であった。

仏教の開祖、釈迦の誕生にまつわる夢として伝えられているものに下記の夢がある。

〔夢13の様子〕 釈迦の母マーヤが午睡をしていると、弥勒菩薩が居るという兜率天より、一頭の白象が下生し、マーヤの周囲を三回右まわりした後、マーヤの右脇腹から胎内に入りこんだ。この夢をみてマーヤは釈迦を懐胎した⁵⁾。

図1は、釈尊托胎に関する伝承を浮彫りにしたもので、中央には正装したマーヤ夫人が右手を頭の下に置いて横たわり、足もとには燭台、枕許には水瓶があ

図1 霊夢托胎(インド博物館蔵:中村元編 1980「ブッダの世界」
学習研究社より)



る。二人の侍女がクッションの上に坐っている。一人は抱子を手にし、一人は両手をあげて驚きを表している。枕許の侍女は合掌している。上部には、頭部に飾り布をかぶった六牙の白象が空中からまい降りようとしている。その上側にはこの彫刻のモチーフである(世尊の托胎)の文字が記されている(中村元編 p.90)。白象は釈迦の化身であった。以来、仏教では象を霊獣として崇め、今日に至っている。

我が国の状況に目を移してみると、日本民族の神観念にもとずいて発生してきたものに神道がある。その教典である「古事記」と「日本書紀」にも夢が記載されている。ここにそれらの中から、古川哲史⁶⁾の示唆によると我が国の夢

の記録では最も古いと思われる夢を下記に示す。

神武天皇が熊野村に行った時、山から大きな熊が出て来たので、天皇は部下と一緒に気を失ってしまった。そこへ熊野の高倉下という者が剣を持ってきて、天皇が病臥されているところにその剣を差しあげると、天皇は正気に返った。そして、その剣を受けとり邪神を退治し、部下も毒気からさめた。その後で、天皇は高倉下にその剣をどうやって手に入れたかを尋ねると、それは次に示す夢のお告げによって得られたのだという。

〔夢14〕「私が夢に見ましたのには、天照大神と高木の神との御二方の御命令として、建御雷の神をお召しになって仰せられるには葦原の中っ国は大変に乱れている。わが子孫の者どもは邪神の毒気に触れて病み臥しているらしい。あの葦原の中っ国は、あなたが一人で平定した国土であるから、建御雷の神あなたが降って行って治めて頂き度いと仰せになりました。然るに建御雷の神がお答へになるには、私が降りませんでも、主としてかの中っ国を平定しました剣がありますから、それを降しませう（この刀の名は佐土布都の神と云ひ、別名を甕布都の神とも、また布都の御魂とも云ふ。この刀は石の上の神宮に御鎮座になって居られる）。この刀を降します有様は、高倉下の倉の棟に穴をあけて、そこから落とし入れませう、と申し上げられました。そこで御雷の神が私に御教へになるには、お前の倉の棟に穴をあけて、この刀を落とし入れよう。それで朝起きたならばすぐにこの刀を見て、それを持って行って天神の御子孫に献れと御さとしになりました。それで夢の御さとしに随って、朝早く私の倉を見ました所が、夢に見たように刀がありました。そこでその刀を献上するのであります⁷⁾。」

朝起きて、夢のお告げの通り行動すると、邪神が退散したという。この夢も神と人間の間をとりもつ媒介となっている。

浄土真宗の開祖、親鸞の決定的な自己変革の契機はほとんど夢によって起っている。親鸞が既成仏教との相剋の末、新しい宗派建設の第一歩をふみ出した時のみならず、法然の門下に入った時や肉食妻帯に踏みきった時なども夢のお告げによる。ここに新宗派が誕生した時の夢をみってみる。親鸞は京都六角堂に

百日間こもり業を行なった時、95日目に次の夢を見た。

〔夢15〕夢に（聖徳太子の化身でもあった）救世観音が現われ、次のように告げた⁸⁾。

臨 一 我 行
 終 生 成 者
 引 之 玉 宿
 導 間 女 報
 生 能 身 設
 極 莊 被 女
 樂 敵 犯 犯

汝宿報によつてたとえ女犯するとも、われ女身となつて犯され、一生の間よく仕え、臨床には導いて極楽に生れさせよう、という意味である。「親鸞夢記」によると、救世菩薩は、これはわが誓願なり、一切群生に説き聞かすべし、と告げた。そこでその告命どおり数千万の有情にこれを説き聞かせた、と見て夢がさめたという。これが親鸞の回心開悟を決定した（西郷信綱 p. 64）。この夢によつて親鸞は勇氣と情熱をもつてことに當つていく契機を得ている。

この時、親鸞は29歳であつた。青年期以後の宗教的回心は往々にして、個人の人格への影響はより深刻であり根本的である⁹⁾。親鸞のこの夢の出現過程、すなわち、夢見前の意識状況の対立や葛藤、対立物の合一の象徴の出現、夢見後の人格転換といった一連の過程は、マンダラの出現過程と非常に類似している¹⁰⁾。

2. フロイトの宗教観

フロイトの宗教に対する見解は「トーテムとタブー¹¹⁾」に著わされている。フロイトによると「だれにとつても、神は父親になぞらえてつくられたものであつて、神との人格的關係は、肉親の父との關係に依存しているから、それと

ともに動揺したり、変化したりするのである。つまり、神とは、根本においては、高められた父親以上の何ものでもないわけである¹²⁾。」

原始社会の道德律・社会の文化形式・神経症など諸々の現象と同様に、宗教の起源も、幼児期の息子と父親の宿命的敵対関係にあるエディプス・コンプレックスに帰せられる¹³⁾。息子たちは母親をわがものにするため父親を侮辱してしまうことから罪意識を生じる。そこで、父親の延長上に父親になぞらえた神を作り、それに事後服従することによって、父親をなだめ自分の罪悪感をもしずめようとする試みが認められる。それ故、宗教は父親への罪意識から生じる、というのがフロイトの見解である¹⁴⁾。

その後、70歳を越えたフロイトは¹⁵⁾ 宗教に対する批判「幻想の未来¹⁶⁾」をあらわした。これはそれまでの考えを更におし進めたものであり、その要旨は次の如くである。エディプス・コンプレックスに関するフロイトの見解に示されている通り、小児が性欲をもたない生物である、という所信は幻想である。父親への罪悪感に耐えられない頼りない小児は、その不安を現実の保護者である父よりもっと強い父の存在を求めることによって解消しようとする。それが慈悲深い神の摂理を想定させる。教義は経験の累積でも思考の成果でもないのであって、実は幻想なのである。宗教的観念の不思議なまでの根づよさは、とりもなおさず、この小児的願望の強固さをものがたっているのである¹⁷⁾。それ故、小児性欲に由来する宗教は幻想であり、人間を理性から遠ざける人間の弱さである。それは人間の独立と自由を妨げるものであり、克服すべき小児的願望である。宗教的教育などはもってのほかである。非宗教的教育こそ豊かな強い人間をつくるもので、それは決して無駄ではないとする。以上が「幻想の未来」の要旨であるが、ここに至っては、宗教の意義は完全に否定され、宗教は克服されるべきものになっている。題に言う幻想とは、明らかに宗教のことである。次に、フロイトと著しい対照をなしているユングの宗教に対する見解を検討したい。

3. ユングの宗教観

ユングは宗教心理学を二つのカテゴリーに分類している。第一は宗教的人間についての心理学で、第二は宗教それ自体 religion proper ないし宗教的内容 religious contents についての心理学である。前者は特定の宗教に入っている人間を問題にする。後者は無信仰者であろうが、特定の宗派に所属しているかどうかは問題でない。重要なことは経験の性質や内容が宗教的かどうか、すなわち宗教体験がなされたかどうかである。ユングは「宗教の問題について議論する勇気を与えたのは、後者における自分の経験である¹⁸⁾。」と述べている。では、ユングの考えている宗教とはどのようなものかを考えてみたい。

ユングは宗教に本質的なものとして宗教体験をあげているが、その宗教体験の中核としてルードルフ・オットー¹⁹⁾のヌミノースム体験を重視している。ヌミノーゼ (das Numinöse)²⁰⁾ なる語は、オットーがラテン語のヌーメン (神の意志や超自然的なものなどを意味する numen) をもとにして造った言葉である。オットーは「聖なるもの」を追求し、それから道徳的要素と合理的要素を差し引いてもまだ残るものをヌミノーゼと呼んだ。そのヌミノーゼ体験とは非合理的な感動的情緒的体験であり、畏敬、力強さ、魅惑などを同時に感じさせる体験を表現したものである。

ユングは“Psychology and Religion (1938/1940)”で「宗教とは、ルードルフオットーがいみじくもヌミノースム (numinosum) と呼んだもの、つまり、意志による恣意的な行為によっては生じない動的な存在ないし作用を、慎重かつ良心的に観察することである²¹⁾」と定義した。

ここでユングが宗教と呼んでいるものは、いわゆる宗派ではない。宗派とは根源的な宗教体験 (すなわち、ヌミノース体験) が教義や教則を持つに至ったものである、とみなしている²²⁾。個々の宗派が、宗教体験をもとにしていかなる教義を作り上げているかは、この際、考慮のそとに置かれている。さらにここで言う宗教とは、信仰 (belief) などでもない。信仰とは、ヌミノース的な効果を持ったある特定の体験に対する信頼ないし忠誠心といえる²³⁾。今、問題となっているのは、宗派でもなく、信仰でもなく、体験なのだということが指摘されなければならない。

以上の定義で第一に問題にしておきたいのは観察の対象である。これは一言でいうならばヌミノース体験である。主体である人間はヌミノースの体験者であると同時に、観察者でもある。ヌミノース体験は人間の意志によって生じるものではなく、逆に人間はその作用の創造者どころか犠牲者なのである。ヌミノース体験は、その原因はなんであれ、人間の意志とは無関係な体験なのであり、主体である人間を捉えかつ支配するのがヌミノース体験である²⁴⁾。

ユングは“psychology and Religion” 以後も多くの著書で²⁵⁾宗教について論じているが、それから約20年後に著わした“The Undiscovered Self (1957)” に述べられている「宗教とは、ある目に見えず制御することもできない要素を慎重に観察し顧慮することであって、人間に固有の本能的態度である²⁶⁾。」という定義に、その後のユングの宗教観の発展過程が端的に表われていると見ることができる。

この定義でも第一に問題にしたいことは、前と同じく、観察の対象である。“psychology and Religion” ではその対象は、「意志による恣意的な行為によっては生じない動的な存在ないし作用」とは言いながらも、「オットー、R. がいみじくも numinosum と呼んだもの」と限定されていた。しかし、その後の見解は上にあげたように観察の対象から「numinosum と呼んだもの」という限定をはずし、「ある目に見えない制御することもできない要素」というふうに観察の対象を拡大したのではないかと思われる。

ユングの宗教観で第二に問題にしたいのは、「宗教体験」の評価に関するものである。それに対する結論から言えば、「宗教体験とは、その内容の如何には一切関係なく最高の価値 (the highest value) 評価を受ける体験である、と定義してもよい²⁷⁾」といい、その根拠は、それを体験する人々にとって、それは一切を意味するからだという。「宗教体験を持ったことのある人にとっては、それは生命と美の源泉となり、世界と人類とに新しい輝きを与える偉大な財産となったのである。そのような人間の心には信仰と平和が宿っている。そのような生活は合理的でないとか、そのような体験は根拠がないとか、そのような信仰は幻想にすぎない、といったところで、事実この世の中に、我々に生きる

勇気を与えてくれる真理にもまさる真理はないのではないか²⁸⁾」宗教体験とは絶対的なものであり、そのような体験をしたか、しないかが問題であり、それについて論議することは無駄であるという。

フロイトにとっては、内的体験による以外には真実性を証し得ないものは科学ではなく幻想である、従って、宗教は幻想となる²⁹⁾。それに対し、ユングはその幻想こそ真理だと考える、といっても過言ではない。

“Psychology and Religion”で最高の価値評価を受けた宗教体験は、約20年後の“The Un discovered Self”では「人間に固有な本能的態度」となっている。これはその評価を減ずるものではなく、その根拠を更に確実なものとして受けとめることができたことを意味すると思われる。次に、宗教体験はいかにして本能的態度となり得るかを考察する。

4. 元型とヌミノース

ある種の観念は、いつの時代でもあらゆる処に遍在しており、集団や伝統とは全く無関係に自然発生的に創り出される。例えば、聖母マリヤの処女受胎の観念、マヤ夫人は白象が右脇より胎内に入った夢を見たという釈迦懐妊の話、老子の母は天上より飛んできた五色の珠のようなものを呑みこんで妊娠したという話、ギリシャ神話の英雄たちは人間である女性と主神であるゼウスの間に生まれたと伝えられていること、鬼を退治した桃太郎は桃から生まれたという我が国の昔話など、それらの中に共通して見られる偉人の懐妊説話のように、時代や地域を越えた共通した観念は、個人の意識によって創り出されるのではなく、これらの観念が個人にふりかかってくるのである——これらの観念が個人の意識の中に強制的に表われる³⁰⁾。

この場合、ユングが問題にするのは、その観念の真偽の判断ではなくて、異質的文化においてもこのように共通した洞察様式がみられるという心理学的現象である。時間と空間を越えて存在するこのような洞察様式があるということを説明するために、ユングは元型の概念をもってきた。元型の概念は1つの仮説であるが、それは本能と極めて近い関係にある。「本能 instincts は、我々の

意識的動機と結びつこうが、つくまいが、(生物学的レベルでは) 本能に特有な規則的かつ普遍的な行動様式 *modes of action* である³¹⁾。」同様に、「元型 *archetypes* は、その神話的性格を認知されようがされまいが、(心理学的レベルでは) 元型に特有な普遍的な洞察様式 *modes of apprehension* である³²⁾。」

本能や元型の現われのような、自分の父や母など個人的経験を越えた現象を考えると、その背後に個人の意識のあずかり知らない普遍的なものの存在を考える必要がある。ユングはフロイトの個人的無意識に対し、普遍的無意識 (*collective unconscious*) の考えを発展させた。すべての人類に共通な「普遍的無意識は諸々の本能の集まりやそれらの相互関係、諸々の元型から成り立っている。すべての人は本能を持っているように、一群の元型的イメージをも持っている。……行動しようとする衝動と状況の洞察は、どちらが先に現われるのか私はわからない。両方とも同じ生命活動 *same vital activity* の側面であると思われる。それを二つの異なる作用として考えなければならないのは、単により良く理解するためである³²⁾。」我々が本能として理解しているものと元型とは、その源泉を同じ生命活動に有しており、いわば表裏一体をなすものと考えられ、それらは人類に共通な普遍的無意識に由来する、というのである。

では、人間にはもって生まれた本能が備わっている如く、元型も備わっているとしても、宗教にとって最も重要な意味を持つと考えられたヌミノース体験(宗教体験)が人間に固有な態度であらねばならぬ根拠はどこにあるのであるか。この問に対してユングは、元型の一側面として次のことを主張する。すなわち「元型が表われた時、元型は明らかにヌミノース的性格を有する。それはもし“魔術的 *magical*”という言葉が強すぎるなら“神靈的 *spiritual*”としか叙述しようのない性格である³³⁾。」

「元型は夢や空想物の中にしばしば霊 *spirit* の姿をとって表われるが、幽霊のように振舞ったりすることさえある。元型の持つヌミノシティ *numinosity* には神秘的な雰囲気はただよっていて、情動にそれ相応の影響を与える。」それ故、この現象は宗教心理学に最も重要な意味を持つという³³⁾。

宗教体験であるヌミノース体験は、元型より産出されるものであり、元型が

現われた時に生じる体験の一側面である。元型が現われるときには、心的に必然的な諸反応を伴うが、そのときの反応の一つがヌミノース体験であると考えられる。元型はア・プリオリに存在する型、つまり普遍的無意識に内在し、個々人の生成消滅とは無関係に存在する一つの型である。元型は常に在るもの、いわば永遠の現在である。従って、問題はただ意識がこれを知覚するかどうかというだけである³⁴⁾。

5. 宗教体験の内容

宗教に本質的なものとして宗教体験があげられた。そしてその体験の中核になるものとして *numinosum* 体験 (1938)、あるいは、ある目に見えず制御することもできない要素 (1957) が示されたが、それらは必ずしも同一の内容を示すことばではないのではないかという疑問も残る。しかし、*numinosum* 体験と呼ぶにしろ、他のことばで呼ぶにしろ、それは合理的な概念的把握が困難な、非合理的な情動的要素を含んだ体験を指していることは明らかである。実際の経験や観察を重視したユング心理学を考察していくには、彼がどのような経験や観察にヌミノース的性格を認め、また、どのような事柄を指して目に見えず制御できない要素と呼んでいたかを検討する必要がある。本節では宗教体験の中核にあるといわれるその体験内容を (1)自分の内部にヌミノース的性格を認めざるを得なかった事例 (2)エルゴン山の人々に見られる宗教体験 (3)ユング個人の少年時代における宗教体験、の3つに分けてユングの考えている宗教体験とはいかなるものかを検討してみたい。

〔宗教体験1〕ヌミノース的性格を認めざるを得なかった事例

これは、極めてすぐれた知性を備えた若い男性の事例である。彼は自分の神経症がこのまま進めば、自分の精神生活は破壊されると感じて、ユングの助けを求めた。彼が記録した夢と幻覚像の数は全部で千を越える。そのうち「明らかに宗教を扱っている³⁵⁾」と判断された夢の中の1つが次にあげるものである。

〔夢16〕私は一風変わったある荘厳な建物を訪れる。この建物は「精神統一の

家」と呼ばれている。背景に沢山の蠟燭があって、それが上向きの四つの先端を持つ風変りな形に配列されている。建物の入口の扉の前には年老いた男がひとり立っている。人々が中に入って行く。彼らは一言も喋らず、精神を統一するために身じろぎもせずに立っている。扉のところに立っている例の男がこの家に入って行く人々について、「あの人たちは今度出てきた時には浄められている」という。そこで私自身も建物の中に入るが、完全に心を集中することができる。すると次のように言う声が聞こえる。「お前のしていることは危険である。宗教は、女性の像なしで済ませるためにお前が支払わなければならない税金ではない。なぜなら女性の像はなくて済ませられるようなものではないのだから。宗教を心(soul)の営みのもう一つの側面の代償として利用する者に禍いあれ。そのような者は誤謬を犯しているのであって、呪われるであろう。宗教は代償ではなく、心のもう一つの営為を完全ならしめるものとして、そこに最後のものとして加えられるのではなくてはならない。お前は生の充実の中からお前の宗教を生み出すべきであり、そうしてはじめてお前は浄福に到るであろう！」特に声を強めて言われたこの最後の一句と同時に遠くから音楽が聞こえてくるが、それはオルガンによる単純な和音の演奏である。この節にはどこかワーグナーの魔火のモチーフを想わせるところがある。建物の外に出ると、燃えている山が眼に入るが、それを見ながら私は「消されることのない火こそ聖なる火だ」(バーナード・ショウ)『聖女ジョーン』と感ずる³⁶⁾。

彼はこの夢の前にも、明らかに宗教的内容を表わしている夢を記録している。意識の連続性というものが存在しているのと同じく、無意識過程にも一種の連続性が仮定される。その無意識の連続性を考慮しないで、一つの夢を解釈することは極力避けなければならないことであるが、ここに小論の目的に沿った箇所のみを摘出せざるを得ない。

この夢の中の声は、彼に二種類の宗教を説明している。第一の宗教は心の営みの一つの側面であり、女性像の代償として利用する宗教である。分析心理学において女性像は、アニマとして男性の第四機能、すなわち、彼の場合は劣等

機能である感情的要素を表現している³⁷⁾。彼は宗教がある種の扱いにくい感情上の要求の代償となり得ることは知っていた。しかし、あの声によれば、それは一面的だというのである。

声が示すところによると第二の宗教は、まじめなものであり完全な、つまり心の両面を含んだ生の極致 (the very apex of life) であり浄福に至る宗教である。もとより教義としての (as a creed) 宗教より、ほかには宗教について知らなかった彼にとっては、最初はこの第二の宗教は大きな謎であった。

宗教とは一面的な代償などではなく、心のもう一つの面を含んだ生の極致から生み出されるべきものだというのである。それは彼が極度に頼みとしてきた合理主義的で理知的な偏見を打ち砕かざるを得ないものであった³⁸⁾。彼はこの冒険からのがれたいと思った。「しかし、幸運なことに彼はレリギオ religio³⁹⁾をもっていた。すなわち、彼は自分の体験を“慎重に顧慮したのである”。彼には自分の体験に対する十分な信仰ないし忠誠心を持っていたので、その状況にふみとどまって、その体験を継続していくことができた。つまり彼は“神経症たり得るといふ大きな利点”を持っていたので、自分の体験に背こうとしたり、あの声を否定しようとするたびごとに、たちまちにして神経症の状態に逆戻りしてしまうのだった。彼は簡単に“火を消す”ことができず、どうとう、自分の体験の不可解なヌミノース的性格 (incomprehensibly numinous character) を認めざるを得なかった。彼はその消すことのできない火は“聖なる (holy)”ものである、と告白せざるを得なかった。そして、これが彼が治癒するための必要欠くべからざるもの (sine qua non) であった⁴⁰⁾。」これは例外的な事例と言えるかも知れないが、それは完全に近い人間が例外的であることや、また、その時々時代の精神を体現するのは常に少数の人々に限られているのと同じであると考えられる。

この夢の中で知覚したことを慎重に顧慮したことによって、この夢は彼に強烈な体験を与えることになった。彼にとっては、この体験が宗教体験であったのであり、また、この夢は元型から生み出されたヌミノース的性格を含んでいた、と判断される。この体験は、人生ならびに人間に対する彼の態度に広い範

困の変化をもたらした。その後、彼は「正常な発展を辿っている⁴¹⁾。」

〔宗教体験2〕 エルゴン人の宗教

ここでは、ユングがヨーロッパ文化とは異なるアフリカのエルゴン山に住む人々の宗教性に接し、人類に普遍的な宗教体験についての認識を深めた事例について考察する。

エルゴン人はエルゴン山の山腹に居住しており、男は狩猟が仕事で、女は畑などの耕作に従事している民族である。ユングは彼らと親しく付き合いをはじめる。その後、ある老人がユングに「朝になって、太陽が昇るとき、われわれは小屋からとび出して、手に唾をはき、その両手を太陽に向かってさし上げるのだ。」と教えてくれる。その行為(儀式)が何を意味するのか、なぜ手に唾をはきかけるのかを尋ねたが無駄であった。「われわれはいつもそうやってきたのだ」という。彼らは御来光の瞬間の太陽を礼拝しているのである。ユングは、エルゴン山の人々にとっては日の出の瞬間にのみ太陽は神であり、それ以外のときはなんでもないので、と理解する。これについてユングは次のように考察している。

「そのとき私は、人間の魂には始源のときから光への憧憬があり、原初の暗闇から脱出しようという抑え難い衝動があったのだということを、理解した。……したがって朝の太陽の生誕は、圧倒的な意味深い体験として黒人たちの心を打つ。光の来る瞬間が神である。その瞬間が救いを、解放をもたらす。それは瞬間の原体験であって、太陽は神だといってしまうと、その原体験は失われ、忘れられてしまう⁴²⁾。」

もしエルゴン人たちが、悪霊が徘徊する夜が終って朝がきたから喜ぶのだ、というならば、それはもはや直接体験でも、ヌミノース体験でもなく、合理化と言わなければならない。エルゴン人にとっては合理化のはいる余地のない日の出の瞬間の全体験が神的なもの、すなわち、宗教体験であり得たのだと思われる。

〔宗教体験3〕 ユングの個人的な神の体験

ユングは自分が生きているうちには発表しないという約束のもとに「自伝」

を作することを承諾した。この自伝は一般の自伝のような外的なことはほとんどなく、彼の内的体験をつづったものであり、ユングが彼の個人的な神(ユングの用い方では神のイメージ)についての体験を述べている唯一のものである。この自伝をもとに、彼の子供時代に生起した3つの出来事について考察する。これら3つの出来事の関連は、はるか後になってユングの心の中で結びつけられたものであるが、子供についても元型的なイメージとの出会いについて考えなければならぬことを示唆している。

その第一番目の出来事は、ユングが思い出せる最初の夢で、3～4歳頃に見たと思われる夢についてである。

[夢17] 牧師館は、ラウフェン城の近くに全くぽつんと立っていて、寺男の農家の背後には大きな牧場が広がっていた。夢で私はこの牧場にいた。突然私は地面に、暗い長方形の石を並べた穴をみつけた。かつてみたことのないものだった。私はもの珍らしそうに走り出て、穴の中をみつめた。その時、石の階段が下に通じているのをみたのである。ためらいながらそしてこわごわ、私は下りていった。底には丸いアーチ型の出入口があって、緑のカーテンで閉ざされていた。プロケードのような織物で作られた大きな重いカーテンでとてもぜいたくにみえた。後に何が隠されているのかを見たくて、私はカーテンを脇へ押しやった。私は自分の前のうす明りの中に長さ約10メートルの長方形の部屋があるのを見た。天井はアーチ形に刻んだ布で作られていた。床は敷石でおおわれ、中央には赤いじゅうたんが入口から低い台にまで及んでいた。台の上には素晴らしく見事な黄金の玉座があった。確かではないのだが、多分赤いクッションが座の上にあった。素晴らしい玉座でおとぎ話の本当の王様の玉座だった。何かがその上に立っていて、はじめ、私は4～5メートルの高さで、約50～60センチメートルの太さの木の幹かと思った。とてつもなく大きくて、天井に届かんばかりだった。けれどもそれは奇妙な構造をしていた。それは、皮と裸の肉でできていて、てっぺんには顔も髪もないまんまるの頭に似た何かがあり、頭のてっぺんには目がひとつあって、じっと動かずにまっすぐ上を見つめていた。窓もなく、はっきりした光源もなかったが、頭上には明るい光の放

散があった。微動だにしないにもかかわらず、私はいつそれが虫のように、玉座から這い出して、私の方へやってくるかもしれないと感じていた。私はこわくて動けなかった。その時、外から私の上に母の声がきこえた。母は「そう、よく見てこらん、あれが人喰いですよ」と叫んだ。それが私の恐れをさらにいちだんと強めた。目が覚めると、私は汗びっしょりでもう少しで死なんばかりだった⁴³⁾。

ユングの家系では父方にも母方にも数人の牧師を出しており、父親も牧師であり、ユングは宗教に関心を持つような環境で育った。しかし、ユングは3～4歳頃から主イエスを疑いはじめていたと思われる。〔夢17〕はその頃見たものである。この夢を見た後、彼は幾晩かにわたって、それに似た夢を見るのではないかと、それが怖くて眠れないほどであった。この夢に対する印象は、心の中でだんだん大きくなっていき、その後もずっとつきまといユングを悩ませた。毎晩ユングに祈りを教えていた母親の声が、夢の中で「あれが人喰いですよ」と言ったのは、実はフェルロス(男根像)⁴⁴⁾だったとわかるまでに10年を要した。この夢に現われた暗い不気味な男根像は、なぜかイエス・キリストのイメージと重なっていった。ユングにとって主イエスはうす気味のわるい、はりつけにされた、血だらけの体をした死の神のように思われた。葬式を思い出させる黒いフロックコートを着た人たちが、いつもほめたたえる神の愛と親切さは、ユングには秘かに疑わしいものになっていった。この夢を見た当座にも増して、ユングはこの夢は口に出してはならないと感じた。この夢は、彼の生涯と業績の運命的背景ともいえるほどの1つの隠された神秘的 content を持つに至った。彼が誰にも話したことがなかったこの夢で得てきた経験をはじめて妻に打ち明けたのは65歳のときであった⁴⁵⁾。その時までこの夢は秘密にされていた。3～4歳頃に見た「この夢は一生涯ずっと私の心を奮うことになった⁴⁶⁾。」とユングは述べている。

第二の出来事は、10歳の時に起ったある行為であり、ユングが子供時代のクライマックスであったといっている石の人形のエピソードである。少し長くな

るが引用してみよう。

[エピソード1] 当時私は小学校の生徒がみんな使っていた小さな鍵と、定規付きの黄色いニスを塗った筆箱をもっていた。この定規の端に私はフロックコートを着て背の高い帽子をかぶりぴかぴかの黒い長靴をはいた長さ約二インチの小さな人形を刻み、インクで黒く塗り、のこぎりで切り離し、筆箱に入れていた。筆箱の中にはこの人形のためにベッドを作り、布切れで上衣まで作ってやった。私はまたライン川からとってきたつるつるした長い楕円形の黒っぽい石を筆箱の中に入れ、上半分と下半分とを絵具で塗りわけ、ずっと長いことズボンのポケットに入れて持ち歩いていた。これはあの人形の石だった。これらすべてが偉大な秘密だったのである。私は筆箱を家のてっぺんにある屋根裏部屋へ秘かにもってゆき(床板が虫にくわれ、腐っていたので、屋根裏部屋へ上るのはとめられていたのであるが)、屋根の下の梁の上に満足しきって隠した。なぜなら誰もそれを決してみてはならないからである。たましいでさえそれがそこにあるのを決してみつけることはないだろうということが、私にはわかっていた。誰も私の秘密を見つけだして壊すことはできなかったのである。私は安全だと感じ、私自身と争っているという苦しい感じはすぎ去った。あらゆる困難な状況にでくわした時、すなわち私が何か悪いことをしたとか私の感情が傷つけられた時、あるいは父のいらいらや母の病弱が私を憂うつにした時などに、私は注意深く寝かされくるまれた人形を、そのすべすべしたきれいに色を塗られた石のことを考えた。幾度となく——しばしば数週間の間隔で——私は誰にもみつからないことを確かめた上で、秘かに屋根裏部屋へしのび上り、梁によじ登って筆箱をあけ、私の人形とその石を見た。こうするたびに、私は筆箱の中に前もって授業時間中に自分で作り出した秘密の言葉で何かかいておいた巻紙を入れていった。新しい巻紙を加えていくのは厳粛な儀式的行為の性格を帯びていた。不幸にも私は何を人形に伝えたかったのかよく覚えていない。ただ私の手紙が人形にとって一種の図書館となっていたことがわかっているだけである。確かにはいえないが、手紙は私を格別に喜ばせた格言からなっていたのではないかと思う。こうした行為の意味、あるいはそうした行為をどういうふう

に解釈したらいいかということはいっこうに気にならなかった。私は新しく得た安全感に満足し、誰も知らない、誰も達することのできない何かを手に入れたことに満足していた。それは決して明らかにされてはならない犯し難い秘密だったのである。というのは、私の生活の安全がその上にかかっていたから。なぜそうなのか自問しはしなかった。それは単にそうだったのである⁴⁷⁾。

最初の夢のキリストと結びつけられた「人喰いの像」は、一番目の大きな秘密であったが、今や、この「石の人形」は二番目の秘密になった⁴⁸⁾。人形のエピソードは、ほぼ一年間続いた。屋根裏部屋の秘密の人形は、当時のユングにとっては個人的な秘密の宝物であり、生きている守護神であった。それに比べると、教会にあるものは生ではなく、死だと感じ、自分の行くところではないと思った⁴⁹⁾。少年ユングにとって、キリストは1800何年か前に亡くなった一人の男性にすぎず、神について語られることは、すべて帰るところ言葉以上の何ものでもなかった。最後の望みを託していた教会の聖餐式でも、何ごとも起こらず失望を感じていた。しかし、自分の秘密の領域である屋根裏部屋の石の人形で気が安まるごとく、他の人々にとっては聖餐式の背後に大きな「秘密」が横たわっているに違いない、と確信していた。が、少年ユングはその秘密にあずかることはできなかった。

その後、出来事全体をすっかり忘れていたが、35歳の時、ある本によって古代世界においても、楕円形で黒っぽく上半分と下半分に塗り分けられた人形のような石が、たましいの石として神になっていたことを知った⁵⁰⁾。そのイメージは屋根裏部屋の人形と一緒にあった。人形は古代世界の神だったのである。「この回想に伴って、伝統的な直接の道すじを通らずに個々人の心に入ってきている原始的な心の構成要素(元型:拙者註)があるのだという確信が、はじめて私の中に生じてきたのである⁵⁰⁾。」

第三番目の出来事に移る。ユングの父ポールは大学時代、学者として生涯を送ることを志していたが、ポールの父が突然他界したため、経済上の理由で神学の勉強に転じ牧師になった。ユングは10代の後半、自分の職業選択に迷っ

て、父と真面目に話し合ったが、激烈な議論になることも幾度かあった。父はユングに「神学者以外なら、好きなものになっていいんだ⁵¹⁾。」と断固として言うほどであった。二人はお互いに、相手の中に宗教的挫折をみていた。「ユングは「父はすべての体験のうちで最も明らかな神の体験をもたないなどとは思っても及ばなかった……私はこの種の知識は証明できないことを承知していたが、同時にそれが証明を要しないのは夕陽の美しさや夜の恐ろしさと同じだということもわかっていた⁵²⁾。」結局、自然科学かそれとも人文科学へ進もうかという職業上の選択が解決されたのは、夢によってであった。彼は二つの夢を見たが、後の方の夢がもっと重要であった。その夢は次の通りである。

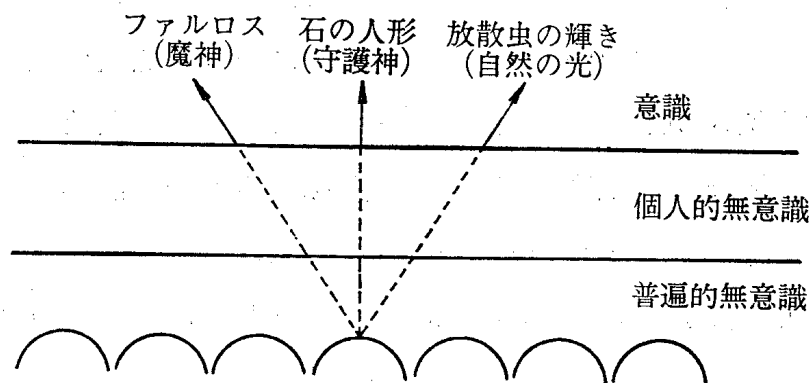
〔夢18〕その後二つ目の夢をみた。この時も私は森の中にいた。森には水路が縫うように通り抜けており、そのいちばん暗い所に私は茂った藪にかこまれた円い池のあるのをみた。半ば水に浸って、とても奇妙で不思議な生き物が横たわっていた。それは円い動物で、乳白色に輝き、無数の細胞か触手のような形をした器官から成っている直径約一メートルの巨大な放散虫だった。この素晴らしい生き物が、秘密の場所の澄んだ深い水の中に、邪魔されずに横たわっているのは私には言い尽くせないほど不思議に思えた。それが私の中に知識に対する強い欲望を生じさせ、私はときどきしながら目を覚ましたのだった⁵³⁾。

この夢を見たことによって、ユングの心からはあらゆる疑念が拭い去られ、不意に湧いたように自然科学に進む決心が固められた。そのような体験を起こさせたのは、水の中の生き物が自然に放っている輝きであった。ユングの考察によると、この輝きはパラケルスス⁵⁴⁾が“自然の光 natural light”と呼んだものにほかならなかった。「自然の光は無意識の暗やみから輝き出ている永遠に消えることのない原始の光である。自然の光は語り得ないが、睡眠中に(神)啓示の力によって顕現し意識を照らすのである。人間はこの光を、とりわけ夢によって学ぶ⁵⁵⁾」ユングはこの自然の光を夢の中に見つけ、職業選択の暗い迷いが消え、進路がはっきり照らされた。

人類に普遍的に現われるという宗教体験は、その非合理的な情動的要素の故に、まさにその体験を除いてはその真実性を証し得ないと言われる。しかし、それらを少しでも合理的に把握しようとして、ユングの子供時代に起きた個人的な三つの体験について考察した。これら三つの心理的現象に歴史的な裏付けを求めるならば、第一の夢に現われた人喰いの像は、いつの世にも恐怖の対象となる魔神の類であり、第二の秘密の人形は、古代でもたましいの石として祀られていた守護神であり、第三の夢の中で暗やみを照らした生き物の輝きは、中世以来パラケルススにより自然の光と呼ばれている生得的な神霊 *inborn spirit*⁵⁶⁾ である。

これら魔神、守護神、自然の光として現われたものは、同じ心的な力、すな

図 1 元型の現われ



わち、元型から産出された象徴の諸側面である。ユング個人が体験した男根像、屋根裏部屋の人形、水の中で輝く放散虫も、それぞれ、人類いつの時代にも現われる元型に特有な普遍的洞察様式の一変形にすぎない⁵⁷⁾。ユングはどのような元型との出会いの体験をヌミノース体験と呼ぼうとするのか、又、目に見えず制御することのできない要素を顧慮する態度、と呼ぼうとするのであろうか。次回はユングの宗教論に対する批判からはじめていきたい。

注

1. Jung, C. G. の著書は特に明記しない場合は, *Collectived Works of Jung, C. G.*, Princeton University Press 1977年版による。
2. 本文中, 事例に関する逸話が, 夢の記載されている頁の直前または直後に記載されている場合に限り, その逸話の出典・頁は省略した。但し, 逸話が他書にある場合や逸話に関する key word はこの限りではない。
 - 1) Jung, C. G. 1938 *Psychology and Religion*. C. W. 11, p. 5 [以下, 本書については適宜, 浜川祥枝訳 *人間心理と宗教* 日本教文社を参考にした。]
 - 2) 新約聖書 マタイによる福音書 1章20~21 1955年改訳版 日本聖書協会
 - 3) 同書 マタイによる福音書 2章13
 - 4) 旧約聖書 ダニエル書 1:17~2:30 1955年改訳版 日本聖書協会
 - 5) ①中村元編 1980 *ブッダの世界* 学習研究社 p. 90 ②水野弘元 1976 *釈尊の生涯* (増補版) 春秋社 p. 33 他
 - 6) 古川哲史 1967 *夢—日本人の精神史* 有信堂
 - 7) 植松安, 大塚龍夫 1934 *古事記全釈* 不朽社書店 pp. 215~219
 - 8) 西郷信綱 1981 *古代人と夢* 平凡社 pp. 63~64
 - 9) 松本滋 1979, *宗教心理学* 東大出版会 p. 99
 - 10) Jung, C. G. (池田紘一・鎌田道生訳 1976 *心理学と錬金術 I* 人文書院 p. 139 「真のマンダラは常に内的な像である。それは心の平衡が失われている場合とか, ある思想がどうしても心に浮かんでこず, 経典を繙いてもそれを見出すことができないので, みずからそれを探し出さなければならない場合などに (能動的な) 想像力によって徐々に心の内に形作られるものである。」)
 - 11) Freud, S. 1913 (土井正徳訳 1953 *トーテムとタブー* フロイド選集 6 日本教文社)
 - 12) *ibid.* p. 405
 - 13) *ibid.* p. 421
 - 14) *ibid.* p. 401
 - 15) フロイトは晩年, 夢を使用しなくなっている。
 - 16) Freud, S. 1927 (土井正徳, 吉田正己訳, 1954 *幻想の未来* フロイド選集 8 日本教文社)
 - 17) *ibid.* p. 43
 - 18) Jung, C. G. *Answer to Job*. C. W. 11, p. 464
 - 19) Otto, R. 1917 (山谷省吾訳 1982 *聖なるもの* 岩波書店)
 - 20) *ibid.* p. 16
 - 21) Jung, C. G. *Psychology and Religion*. C. W. 11, p. 7

- 22) *ibid.* p. 9
- 23) *ibid.* p. 8
- 24) *ibid.* p. 7
- 25) “Psychology and Alchemy (1944), Answer to Job (1952)” 他
- 26) Jung, C. G. (1957) *The Undiscovered Self*. C. W. 10, p. 259
- 27) Jung, C. G. *Psychology and Religion*. C. W. 11, p. 62
- 28) *ibid.* p. 105
- 29) Freud, S. 1927 (土井正徳, 吉田正己訳, 1954 幻想の未来 フロイド選集 8 日本教文社 p. 40 p. 86
- 30) Jung, C. G. (1838, 1940,) *Psychology and Religion*. C. W. 11, p. 7
- 31) Jung, C. G. *Instinct and the Unconscious*. C. W. 8, pp. 135~137 からの抜粋。訳文中の () 内の言葉は便宜的に拙者が加えた。
- 32) *ibid.* p. 138
- 33) Jung, C. G. *On the Nature of the Psyche*. C. W. 8, p. 205~206
- 34) Jung, C. G. 1944 (池田紘一・鎌田道生訳 1976. 心理学と錬金術 I 人文書院 p. 296)
- 35) Jung, C. G. (1938, 1940) *Psychology and Religion*. C. W. 11, p. 24
- 36) Jung, C. G. 1944 (池田紘一・鎌田道生訳 1976. 心理学と錬金術 I 人文書院 pp. 262~263。この夢については前掲書 “Psychology and Religion” でも論じられている。
- 37) *ibid.* 263
- 38) Jung, C. G. *Psychology and Religion*. C. W. 11; p. 42
- 39) 宗教の原語としてのラテン語の *religio* は、本来「慎重な観察」という意味をもっていた。
- 40) Jung, C. G. *Psychology and Religion*. C. W. 11, p. 43
- 41) Jung, C. G. (池田紘一・鎌田道生訳 1976 心理学と錬金術 I 人文書院 p. 291)
- 42) Jung, C. G. 1962 (河合隼雄他訳 ユング自伝(2) みすず書房 p. 98)
- 43) Jung, C. G. 1962 (河合隼雄他訳 ユング自伝(1) pp. 28~29)
- 44) 古代において、生肉食祭と狂騒祭を二大特徴とするディオニソス祭では、男根像を崇拜し、これがかつぎまわったといわれる。ユングはキャスナルトの庭園の中に、この時夢に出てきた男根像を記念して碑を建てた。cf. Jaffe, A., 1979, “C. G. Jung Word and Image” Princeton University Press. p. 141, 他
- 45) Bennet, E. A. 1961 (萩尾重樹訳 ユングの世界 川島書書 p. 20

- 46) Jung, C. G. 1962 (河合隼雄他訳 ユング自伝(1) みすず書房 p. 28)
- 47) *ibid.* pp. 41~42
- 48) *ibid.* p. 48
- 49) *ibid.* p. 88
- 50) *ibid.* p. 43
- 51) *ibid.* p. 116
- 52) *ibid.* p. 141
- 53) *ibid.* p. 131
- 54) Paracelsus (1493~1541) はスイス生まれの医学者・錬金術師であり、ユングの関心を引いた。ユングのパラケルススに関する論文は、C. W. of Jung. 13. 15. その他に収められている。
- 55) Jung, C. G. On the Nature of the Psyche. C. W. 8, pp. 192~195 の要約。
- 56) *ibid.* p. 194
- 57) Jung, C. G. Paracelsus as a Spiritual Phenomenon. pp. 157~172